

<b>Title</b>	小学校から大学までの英語教育：新学習指導要領が示唆するもの(共同研究報告：英語教育研究)
<b>Author(s)</b>	鈴木, 幸
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.19-3 : 27
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=2322">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=2322</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

**【英語教育研究】**  
小学校から大学までの英語教育—  
新学習指導要領が示唆するもの

7月13日月曜日、聖学院生涯学習センターにおいて、上智大学外国語学部教授の吉田研作氏をお迎えして、2009年度第2回英語教育研究会が開催された。21名が参加し、標記のテーマの下、基礎的な言語力が必要であることに着目された吉田氏の発表に耳を傾けた。概要を以下に記す。

今までの英語教育では大人になって使えない、役に立たないと言われているが、そもそも語学のみならず全教科において、論理的に考え、他者とコミュニケーションを行う能力、つまり言語力を身につけることが前提である。言語力があれば、日本語であれ英語であれ、言語は表現の道具に過ぎないと考えられるからである。

まず、小学校からの外国語活動では、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成した上で、言語・文化の理解を深めることを狙いとする。その活動内容も、低学年では身近なことから始め、高学年で多文化との違いを知ることを、「楽しさ」を持って体験させることが大切である。

中学生になると、聞く・話す・読む・書く、という総合的な学習活動が求められる。ままとまりの

ある英語を理解して聞いたり読んだり、つながりのある文章で感想や意見を自己表現できるためにも、4技能を独立させず、また、ただ文法を覚えるだけでなく、体験させることに留意しなければならない。

高等学校では、4技能をさらに統合的に育成するために、科目名を「コミュニケーション英語」とし、また、英語に触れる機会を増やすためにも、英語で授業を行うことを基本とする。そして、グローバルな話題や条件に対しても、論理的に討論できることが課題となる。

そして大学においては、グローバル30を目指した、海外の学生が留学しやすい、留学を希望したいと思える環境を作り、英語で学位取得が出来るためにも、日本人の英語力を高める必要性が生じる。

とはいえ、入試現状を考えると、簡単には移行できないことが懸念される。しかし最終的に、知識としてだけでなく、場面に応じた使い分けも出来るような「英語」を教育活動で体験することは、言語力育成と関連して、自己表現のできる日本人を育てる基礎となることから、理想だけでなく、今後の新英語教育として大いに期待が寄せられる。

発表後の質疑応答では、恥ずかしがり屋という日本人の性格上の問題、限られた時間内での活動や、教員の訓練に対する懸念等、多岐にわたる議論が交わされた。

(文責：鈴木幸 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究所博士後期課程)

(2009年7月13日、聖学院生涯学習センター)



英語教育に携わる教職者らが参加した。